

# 高等学校保健科の 学習意欲に影響を与える要因に関する研究

－ 保健学習の魅力と期待に着目して －

学籍番号 199330

氏名 竹中 健悟

主指導教員 井上 功一

## 1. 背景

### 研究の背景と目的

文部科学省(2018)「高等学校学習指導要領解説」には近年、生徒を取り巻く環境や直面する課題が大きく変化していることが示されている。また、これらの課題に対応するために明るく豊かに生活する資質や能力を育成することが重要であると述べられており、保健科が課題解決に向けて果たすべき役割は大きいと考えられる。しかしながら、高等学校教育における保健科の位置づけは主要5教科以外のいわゆる「副教科」とされ、受験科目としても採用されていないのが現状である。

学習者に視点を移すと、日本学校保健会(2017)が報告したアンケート調査の結果から学習者は保健科学習の重要性は理解しているものの学習に前向きに取り組むこと、つまりは動機づけには課題が残っているのが現状であると考えられる。動機付けの研究にはVroom(1964), Porter & Lawler(1968)らの期待理論があり、この理論ではモチベーションの大きさは「行動が結果につながる主観的な可能性(期待)」と「結果がもたらす魅力」を掛け合わせたもので規定される。このことから、保健科教育においても学習者の「保健学習の魅力」と「保健学習が結果に結びつく期待」の認知の程度によって保健科学習に対するモチベーションの変化がみられ、同時に、モチベーションと密接な関係にある意欲、特にこの場合では保健科の学習意欲にも変化がみられるのではないかという仮説が立てられた。

これらの背景を踏まえ、本研究では目まぐるしく変化する社会の流れに関する知識や課題意識を持つことを目的とした授業実践を行い、保健の学習意欲にどのような影響を与えるのかについて調査・検証し、さらに保健学習の魅力と保健学習の随伴経験が保健の学習意欲にどのように影響しているのかについても調査・検証する。

## 2. 調査及び授業実践

発展課題実習Ⅰ及びⅡの期間中に、社会の流れに関する知識や課題意識を持つことを目的とした授業実践を行うとともに、「学習意欲」、「魅力」、「随伴経験」に関する自由記述式のアンケート調査を行い、授業実践の効果の検証及び学習意欲に魅力と随伴経験がどのように影響するかを調査した。

授業実践では、目まぐるしく変化する社会に関する知識や課題意識を持つことにより、保健科を通じた学習が現代やこれからの社会を生きていくうえで重要であるという認識、さらには

保健科学習への興味を引き出すことを目的とした授業構成に取り組んだ。具体的な授業内容の工夫としては各授業内で「チャレンジ課題」を設定し、現代社会に関する知識や動向、課題について思考し判断し表現する時間を設けた。また、必要に応じてペア活動や班活動を取り入れ、意見や知識を共有する時間を設けた。

### 3. 結果及び考察

保健を学習する魅力について、受験や進路についての記述がまったく見られなかったことから、保健科の学習が受験及び進路に直接的に関連するという意識は生じにくいことが推察され、他の教科とは魅力の構造が異なることが想定される。また、保健科学習の随伴経験は授業で学習した知識や技能が多様な生活場面で活かした経験として認知されている一方で、非随伴経験はテストや成績に関する場面での認知に限定されていることが明らかとなった。さらに「保健科学習の魅力」と「保健科学習とその結果の随伴経験」は保健科の学習意欲に正の影響を及ぼしていることも明らかとなった。また、学習意欲の向上を図る際には思考・判断・表現に必要な基礎的な知識の定着を十分に図ることや学習者のレディネスを適切に把握するとともに授業内で必要な支援を行っていくことが重要であると考えられる。

### 4. まとめ

アンケート調査の結果より、授業内容の工夫として各授業内で課題を設定し、現代社会に関する知識や動向、課題について思考し判断し表現する時間を設けることや必要に応じてペア活動や班活動を取り入れ、意見や知識を共有する時間を設けることは保健科への興味を引き出す手だてとして有効であることが示唆された。また、「保健科を学習する魅力」の認知と「保健科学習と結果の随伴経験」は保健科の学習意欲に影響を与える要因であることが明らかとなったことから、授業実践において魅力を伝えること、授業内容とテストの結果や生活場面での経験に随伴性を持たせる、あるいは予期させることは学習意欲向上に有効な手だてとして考えられる。しかしながら、このモデルでは保健科の学習意欲に影響を与える要因の一部しか捉えることができていないことから、魅力と期待以外にも様々な要因が複雑に絡み合って学習意欲に影響を与えていることを理解しておく必要がある。

本研究では生徒の自由記述に基づいた魅力をもとに調査・分析を行ったが、生徒が認知していない保健科学習の魅力も様々な存在すると想定され、教員がさらなる魅力への気づきを支援していくことで学習意欲の向上に役立てられる可能性も考えられる。一方、随伴経験においては調査結果から保健科学習と成績の随伴性が特に認知されやすい可能性が示唆された。このことから授業内容及び保健科の学習が成績やテストの点という結果につながるという予期を持たせるような内容に改善することも学習意欲の向上に必要な手立てとして考えられる。しかしながら学習内容を極端に簡単にしたり、学習の成果を過大評価したりすることは随伴経験を認知させるきっかけになるかもしれないが、一過性のものであり、学習とその成果を随伴させる際には内容や課題の難易度に応じた「適切な評価」が不可欠になると考えられる。生徒に課した課題や活動が適切に評価されることで、行動に対する正当な結果が期待でき、継続的に課題に取り組むことができるのだ。そのためにも、学習意欲を向上に有効であるとされる授業実践の導入を検討するとともに、多様な評価手法の導入やその信頼性と妥当性の確保に努めることが学習意欲を向上させる上で重要な手立てになると考える。